

第5表 収穫果の大きさ分布

年次	項目 試験区	調査個数	L	M	S	SS	100g以下	平均果重
			191g以下	161~190g	131~160g	101~130g		
45	75ppm区	277	0.0	6.1	50.5	42.2	1.1	135.1
	50ppm区	374	0.2	2.4	44.4	51.4	1.6	129.8
	無処理区	251	0.3	3.6	34.3	55.8	6.0	123.2
46	50ppm区	416	0.0	5.5	53.1	39.2	2.2	133.6
	25ppm区	510	0.2	6.1	54.9	36.3	2.5	136.2
	15ppm区	142	0.0	8.5	45.1	43.4	2.8	133.5
	無処理区	406	0.0	7.8	50.7	40.0	1.5	136.2

果実の横径の肥大率をみると、処理の各区は14日後から無処理区と差が出始める(第4表)。このことからAOPの効果が出るのは処理1週間後ころからと推察される。

4 薬害などについて

薬液の附着による果実、樹体の外見上の薬害、あるいは落果、ヘタスキなどはいずれの区も全く認められなかった。しかしながら処理区のいずれもが、子室痕が大きかった。とくに50ppm以上の着色良好の果実でこの傾向が顕著であった。

4 ま と め

エスレル処理の各区とも熟期促進効果が十分認めら

れ、収穫時の果実の大きさ、品質なども無処理と比べ差がなかった。しかしながら50ppm, 75ppmの濃度では脱渋後の軟化が早く現在のアルコール脱渋法では実用的には無理と考えられる。25ppm前後の濃度である程度の実用性は考えられるが、全般的に着色の良いもの程軟化が早いということを考えれば、適期収穫には十分注意しなければならないし、使用するにしても現状では早場地帯に限定されるべきである。

15ppmの濃度では日時は問題ないが熟期促進効果が少なく、実用性は少ないと思われる。なお、今後は炭酸ガス脱渋を取り入れ日時延長効果について検討する必要がある。

和ナシ二十世紀のユズ肌果発生防止に関する試験

(1) ユズ肌果発生樹に対する高接更新試験

橋 本 登
(福島県園試)

いて検討を行った。

1 ま え が き

近年果物の生産量が多くなり、外国からの輸入量も年々増加の傾向にある。このような状況の中、果物の安定した需要の拡大をはかるには品質の良いもの、すなわち、うまい果物でなければならない。

ナシ栽培において果実の品質を著しく低下させているものにユズ肌ナシがある。このユズ肌ナシの発生の原因については、すでに明らかにされているが、栽培の現況をみるとかなり高い割合で発生している。そこで防止対策の一環として慢性的に多発する二十世紀に新しい品種の高接を行い、ユズ肌果の発生の有無につ

2 試 験 方 法

供試樹：二十世紀, 36年生, 1樹
接穂供試品種

63-4 (幸水×リー28)

新 水 (菊水×君塚早生)

八 幸 (八雲×幸水)

幸 水 (早生幸蔵×菊水)

87-25 (新高×幸水)

30-14 (新興×幸水)

豊 水 (リー14×八雲)

二十世紀

水は昭和46年4月)。

(二十世紀の穂木はユズ肌果の全く発生
していない樹より採穂)

調査項目

ユズ肌果, 裂果, 糖度, 酸度調査

接木時期

果肉硬度調査

昭和44年4月に側枝単位に切接を行った(豊

第1表 ユズ肌果, 裂果, 糖度, 酸度調査

品 種	調査項目	調査果数	平均果重	ユズ肌果発生程度					裂果	果汁糖度	果汁酸度
				無	少	中	多	甚			
		果	g	%	%	%	%	%	%		
63-4(高接)		65	263	86.1	10.7	3.0	0	0	0	12.2	5.4
新 水(高接)		49	196	100	0	0	0	0	0	12.8	4.7
新 水(対照)		10	183	100	0	0	0	0	0	12.2	4.7
八 幸(高接)		69	305	42.1	23.2	24.6	10.1	0	20.2	10.0	5.1
八 幸(対照)		10	362	100	0	0	0	0	0	11.9	5.0
幸 水(高接)		54	264	100	0	0	0	0	0	11.2	4.9
幸 水(対照)		10	286	100	0	0	0	0	0	11.0	4.9
87-25(高接)		106	299	82.0	16.9	0	0	0	0	11.0	4.5
30-14(高接)		46	405	6.5	28.2	52.1	10.8	2.1	0	10.4	4.8
30-14(対照)		10	337	0	30.0	70.0	0	0	0	10.0	4.7
二十世紀(高接)		53	248	28.3	43.3	22.6	3.7	1.8	0	10.6	4.4
二十世紀(対照)		10	325	100	0	0	0	0	0	10.2	4.5

注. 1) 調査基準

無 健全果

少 果実の下 $\frac{1}{3}$ から半分くらいまで凹凸が現れて蒂窪部は少し浅い。

中 赤道部附近まで強い凹凸が現れて蒂窪部は極めて浅い。

多 果面全体に凹凸が現れ特に下半分は著しく, 蒂窪部は極めて浅い。

甚 果面全体に著しい凹凸を生じ, 果形は変形する。

2) 対照とは採穂した樹で苗木より育成した5年生樹。

第2表 果肉硬度調査

品 種	調査項目	調査果数	ユズ肌果発生程度別硬度									
			無		少		中		多		甚	
			胴部	蒂窪部	胴部	蒂窪部	胴部	蒂窪部	胴部	蒂窪部	胴部	蒂窪部
		果	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
63-4(高接)		65	1.38	1.37	1.46	1.51	1.41	1.41	—	—	—	—
新 水(高接)		49	1.34	1.38	—	—	—	—	—	—	—	—
新 水(対照)		10	1.38	1.42	—	—	—	—	—	—	—	—
八 幸(高接)		69	1.61	1.66	1.62	1.82	1.83	1.91	1.82	1.95	—	—
八 幸(対照)		10	1.54	1.51	—	—	—	—	—	—	—	—
幸 水(高接)		54	1.46	1.44	—	—	—	—	—	—	—	—
幸 水(対照)		10	1.52	1.46	—	—	—	—	—	—	—	—
87-25(高接)		106	1.68	1.66	1.71	1.77	—	—	—	—	—	—
30-14(高接)		46	1.46	1.47	1.45	1.52	1.45	1.38	1.35	1.35	1.47	1.42
30-14(対照)		10	—	—	1.36	1.34	1.27	1.20	—	—	—	—
二十世紀(高接)		53	1.59	1.63	1.63	1.86	1.66	2.19	1.66	2.17	1.81	2.18
二十世紀(対照)		10	1.53	1.55	—	—	—	—	—	—	—	—

3 試験結果

1 ユズ肌果の判定は外観的な症状と果肉硬度をもつて判定した。外観的な症状は調査基準に従って肉眼により判別を行った。

高接された63-4, 八幸, 87-25
30-14, 二十世紀, および対照区の30-14において特有なユズ肌症状が現れた。特に二十世紀, 八幸において著しい発生がみられた。しかし, 新水, 幸水においては全くその発生は認められなかった(第1表)。

2 これらユズ肌症状の果実の果肉硬度を測定した結果は第2表に示すとおりであるが, 八幸, 87-25, 二十世紀で発生程度別(小)において1.7 kg以上の硬度を示した。しかし, 63-4, 30-14はいずれも1.5 kg以下の硬度であり, ユズ肌果特有の果肉の粗さはみられなかった。

3 八幸は早生種の青ナシとして, これから増殖の期待される品種であるが, 60%近くの果実がユズ肌

果が発生し, しかも症状の著しい果実の約20%が, 袋の中で蒂窪部から胴部にかけて裂果が発生した。

4 果実の肥大については, ユズ肌果の発生の著しい場合は肥大が劣っているが, 発生の認められない新水, 幸水, では正常な肥大を示している。また, 高接された枝の伸長については現在のところ著しく伸長の悪いものは認められないが, 接木される位置による伸長の差異は発生している。

4 摘 要

高接更新によってユズ肌果の発生防止の可能な品種は, 現在早生系の赤ナシで注目されている, 新水, 幸水である。両品種とも品質が優れ, 果実の肥大も良く有望な対策と考えられる。特に福島県の場合, 長十郎, 二十世紀の栽培の比率が高いため, 出荷期を早めて有利に販売すると同時に, 労働力の競合を避けるためにも, ユズ肌樹に対して高接更新は極めて有効な方法である。

ミスト利用による緑枝ざし試験

—モミジ・ヒガンザクラについて—

新田 齊^{*}・富田高儀^{**}・竹林 章^{***}

(^{*}福島県農改課・^{**}福島県園試いわき支場・^{***}会津若松普及所)

1 ま え が き

モミジ, サクラのさし木繁殖は, 一部の種類では可能であったが, 発根困難な種類とされ, 実用的にはほとんどが接木繁殖であった。

しかし, 近年ミスト法, 発根促進物質の利用等により, さし木繁殖の実用性が検討されている。

筆者等はこのたび, モミジ(デショウジョウ), ヒガンザクラを用い, ミスト利用による緑枝ざしについて検討した。その結果2・3の知見を得たので報告する。

2 さし木用土試験

1 試験方法

モミジのミスト法に適する用土組合わせを検討するため, さし木用土はピートモス, パーミキュライト, 鹿沼土, 山砂を組み合わせ, 7処理とした。

穂木は天葉が展開し, 茎がやや木質化したものと, 秋伸びし, 未展開葉が2-3枚の新梢の2処理とした。さし木は8月22日に行った。参考としてサザンカ,

アザレアを用いた。

さし木床は25×45×6 cmのポリカゴを用いた。

さし木場所はヨシズ覆いしたミスト室を用い, 5時から17時30分まで30分間隔, 15秒スプレーのタイマー方式を用いた。

さし木後75日経過した11月5日に掘り取り調査した。

各用土の三相, pHはさし木と同一の用土を素焼鉢に取り, ミスト下に置き, 終了時に調査した。

2 試験結果

活着割合は用土により異なり, パーミキュライト単用の5%から, 山砂の90%と大きな差があった(第1表)。参考のサザンカはパーミキュライト単用で76.7%, パーミキュライト7, 山砂3および, 鹿沼土7, 山砂3が100%の活着を示し, また, アザレアではピートモスの活着が良く, 樹種により用土は異なる。

モミジの活着の良かった用土は固相割合の高い用土が良く, ややしまった感じの用土が良いと考えられる。pHから見ると5.30~5.82の範囲の活着が良かった。

穂木の熟度による活着は, 山砂では熟枝の55%に